

舞楽面

古来、舞踊は宗教的儀式の一環でしたが、式典の際の仮面舞踏(舞楽)や特権的な来賓のための仮面舞踏は日本社会の一つの側面となりました。これらの舞踊は、大宰府が外交と文化交流の一大中心地だった 7 世紀に、訪れる高官のために行われました。ここに展示されている三つの儀式用の舞楽面は、一つが陵王面、二つが納蘇利面で、13 世紀に作られました。

これらの仮面の顔の特徴は、典型的な日本のデザインのものではありません。特徴的な長い顔、突出した鼻、膨れた目は、舞踊の演技に「国際的な」特色を加えました。陵王面は翼のある竜のトサカをつけており、竜の脚が耳の下まで伸びています。同様の仮面のデザインはインドネシアでも見つかっていますが、日本ではめったに見られません。